

クドバスワークショップによる 子育て支援社会連携研究センター機能の検討

西村美東士

1. 目的

「地域連鎖の形成支援」により、「連鎖的参画による子育てのまちづくり」と「社会に開かれた子育て観への転換」を実現するために果たすべき「聖徳大学子育て支援社会連携研究センター」（以下、支援センターと呼ぶ）の機能について明らかにする。

2. 方法

職業能力開発手法クドバス(CUDBAS= Curriculum Development Method Based on Ability Structure)の手法を援用して、センター機能に関する「クドバスチャート」を作成する。

その成果を分析し、求められるセンター機能の全体像を検討する。

3. 経過

クドバスの創始者である森和夫(技術・技能教育研究所所長)を指導者として依頼し、本研究テーマのもとにクドバスワークショップを実施した。その当初の趣旨は次のとおりであった。「本研究の3つのプロジェクトすべてに共通する不可欠の専門的技術的基盤としての職業能力開発手法クドバスに関して、学内研究員の技能習得を図る。また、支援センターにおける研究開発の一環として、子育て支援者等の職能分析とその構造化のための「ラダーづくり」を行い、機能カードの「山分け」職能段階の明確化を図る」。

しかし、実際には参加者が少数であったことなどの事情から、テーマを支援センターの機能に焦点化して実施した。また、「ラダーづくり」については、今回の成果をもとに、支援センターにおける子育て支援実践をとおして開発することとした。

2回にわたって実施したワークショップの進行は表1のとおりである。

表1 ワークショップの進行

ワークショップ集合※1	10:30～12:00	講義「クドバスの概要と進め方」(森和夫)
	12:00～12:20	グループ課題打合せ
	12:20～13:30	休憩・移動
	13:30～15:30	クドバスチャート作成
	15:30～15:40	ブレイクタイム
	15:40～16:30	成果物の検討
	16:30～17:30	講師まとめ
フォローアップ集合※2	14:00～15:00	講義「クドバスチャート・ラダーづくりの他 領域実践例」(森和夫)
	15:00～16:10	ブレイクタイム
	16:10～17:00	成果物の相互評価と修正及びコンセプトの作成
	17:00～18:00	講師を交えた情報交換

※1 平成18年3月7日

※2 平成18年3月29日

8.1. 子育て支援体系の確立

その結果、表2のとおりクドバスチャートを完成させた。

現在は、支援センター担当教員と保育者が、その成果を実践的に継承し、支援センター経営戦略や事業評価等のためにさらなる開発発展を進めている。

表2に示したチャートをもとに行われたフォローアップ集会において、センター機能全体を表すコンセプトとして、「本センターは子育て支援を支援する「センター オフ センター」である」というフレーズが作成された。



カードの重要度の順位付け

表2 期待される聖徳大学子育て支援社会連携研究センターの機能

テーマ：期待される聖徳大学子育て支援社会連携研究センターの機能（重要度順） 作成日：平成18年3月7日（A）修正日：平成18年3月29日（B）指導者：森和夫 第1回作成者：奥野智子、西野子、斎藤裕子、斎藤ゆかり、西村美穂子、佐々木功					
仕事	機能-1, 6, 11, 16, 21	機能-2, 7, 12, 17, 22	機能-3, 8, 13, 18	機能-4, 9, 14, 19	機能-5, 10, 15, 20
子育て支援、ボランティア育成につながる実践的研究を行う。	1-1 A 本部の支援者の研修・交流センター	1-7 A 子育て支援者マニュアル作成	1-3 B ボランティア育成の力リキュラムが蓄積されている	1-4 A 市民が教員と一緒に研究する	1-5 A 学生の子育て支援能力を向上させる
	1-6 B 学生が子育て中の間に触れる機会がある	1-7 A 学生の実情やボランティアができる	1-8 A 子どもに関する専門的研究を進められる	1-9 A 聖徳大学教員の学科横断的サロンの	1-10 B 子育て支援の現状と効果を把握することが出来る
	1-11 B 母親会に職員に対しての研修やアンケートを実施	1-12 B 先生や学生の積極的な交流・研究活動	1-13 B 新しい道具を子どもがどのように扱うか観察できる	1-14 B ボランティアが何をやりたいかを知っている	1-15 B ボランティアを参加させることができる
	1-16 B サークルリーダーとボランティアをつなぐ場になる	1-17 C 保育の聖徳としてモデルになる子育て支援ができる	1-18 C 保育の聖徳としての専門性が高まる	1-19 C 子育て支援学会の設立	1-20 C 利用者が支援者になれるような支援・協働
	1-21 C 視察来訪者にサポート一になつてもらう	1-22 C ひとときを過ごすことができる	1-23 C 他の子ども関係組織とのネットワークがある	2-4 B サロン内の連携が取れる	2-5 B 生涯学習支援センターと連携が取れる
	2-1 A 学生・地域・聖徳が連携できる	2-2 A 行政と地域（ボランティア）をつなぐことができる	2-3 B 他の子ども関係組織とのネットワークがある	2-4 B サロン内の連携が取れる	2-5 B 生涯学習支援センターと連携が取れる
	2-6 B 学生の地域に対する貢献度が上がる（イメージアップ）	2-7 B 学生の生涯学習（うた・語り）	2-8 C 重宝への交流をするところがある	2-9 C 他大学の学生でも学んだり参加したりできる	3-4 B 良いおもちの情報が得られる
	3-1 A 子どもの遊び場（公園・体育館）・情報が得られる	3-2 A 多様な子育て情報を知ることができる	3-3 A 私生活の子育てサロンにのびのびと過ごせる	3-4 B 良いおもちの情報が得られる	3-5 B 良いおもちの情報が得られる
	3-6 B ホームページでイベント情報や空き状況が調べられる	3-7 B 多く思いを寄せられる質問への回答をHPで掲載	3-8 B 育児テーマのブログを開設	3-9 B 育児用レシビをHPで提供	3-10 C 子ども用部をあげたりもらったりできる
	3-11 C サロンに職員の顔写真・担当などを掲示	3-12 C 新生児育児の特別モデルをHPで提供	4-3 A 地域の子どもや親との出会いの機会が持てる	4-4 A リタイアした人々や子どもが遊ぶことができる	4-5 B 新年会と良い親が交流できるイベントがある
異世代・異文化交流ができる機会や場を提供する	4-1 A 親になる人が実際に子どもに触れることができる	4-2 A 地域の人が気軽に集まることのできる	4-3 A 地域の子どもや親との出会いの機会が持てる	4-4 A リタイアした人々や子どもが遊ぶことができる	4-5 B 新年会と良い親が交流できるイベントがある
	4-6 B 子ども・親・学生・市民などが互いに交流できる	4-7 B 中・高校生が子どもと触れ合うことのできる	4-8 B 中学生も子育て・子どもについて勉強や手伝いができる	4-9 B お年寄りから伝承遊びを学べる	4-10 C おじいさん・おばあさんに慣れ親しむ機会がある
	4-11 C 外国人と子どもの交流ができ、語学力をアップできる	4-12 C 世界の子どもたちの様子を映像で見ることが出来る			

8.1.1. クドバワークショップによる子育て支援社会連携研究センター機能の検討

5 日	5-1 A	5-2 A	5-3 B	5-4 B	5-5 B
モデルとなる遊び場を提供する	家族みんなで遊びに来れる	去来を使った遊びができる	サロンの時間内にうた・本読み・時間がある	絵や音楽など芸術を教えてもらえる	本職のおもちゃで遊べる
	5-6 B	5-7 B	5-8 B	5-9 B	5-10 C
	使いやすさ(年齢)が決められる	障害児と健常児が一緒に遊べる	(お絵描き・音の遊びなど) 多くの遊びが体験できる	バリアフリーで誰でもアクセスできる	子どもの能力が向上する(英語や体操)
子どもたちのニーズに合った商品を開発する	5-11 C	6-2 A	6-3 B	6-4 B	6-5 C
	子どもが汚してもシャワーを浴びられる	年齢・性別に合った遊具を知ることができる	手作りおもちゃの作りかたをプリントにして配布	子どもが楽しむ教育施設作成	母子家庭の自立支援のための起業家支援
	6-6 B	6-7 C	6-8 C		
幅広い分野での子育て相談を行う	7-1 A	7-2 A	7-3 B	7-4 B	7-5 C
	子育て中の育児法(ワザ)を知ることができる	特定の母親(育児不安など)に対する個別相談ができる	対夫婦の子育てカルデアの作成	子どもの家庭について相談ののちもらえる	アレルギー児へのレシピの提供(口頭説明)
	7-6 C				
親子の交流と父親の育児参加を支援する	8-1 A	8-2 A	8-3 A	8-4 B	8-5 B
	父親・母親の育児の苦労を解消できる	自主的な子育てサークルを育成する	父親の役割について章モデルを提示	母親たちのグループが集まれる場	同年齢や近所同士の母親たちに「友達紹介カード」を渡す
	8-6 B	8-7 B	8-8 B	8-9 B	8-10 B
親子がリラクゼーションできる場を提供する	子どもと母親・母親と子どもに時間・曜日分けする	子どもから離れて親たちが会話を楽しむことができる	父親でも兄弟に足を踏み入れられる	父親対象の育児講座がある	父親に子どもとの遊び方を指導
	8-11 B	8-12 C	8-13 C	8-14 C	8-15 C
	父親向け母乳教室	おやじの会のリーダーを養成	高校生・大学生を持つ親子の交流と支援	中高生の親と乳幼児の親とが交流できる場の提供	父親が参加できる料理教室(イベント)
親子がリラクゼーションできる場を提供する	8-16 C	9-2 A	9-3 A	9-4 B	9-5 B
	サンママ(元ヤンキー)の子育ての視点	リラックスできる場(ソファや・緑)の提供	親子がリフレッシュできる機能有る	真珠(育児に関するもの・関連しないもの)の提供	子育て親子ができるようランチタイムを設定
	9-6 B	9-7 C	9-8 C	9-9 C	
親子で楽しみ学ぶイベントを実施する	子どもを連れて親がサークル等に参加できる	美容院・病院などに行く際の短時間の待合室	子どもの遊べるスペース	子どもを連れて親が相談できる	
	10-6 B	10-7 B	10-8 C	10-9 C	
	遊びを提案する場の提供	子どもの成長記録ビデオの撮り方(動画)教室	ちょっとした幼児教室のようなお茶の実施	親子をベビーバゴ教室	
親子で楽しみ学ぶイベントを実施する	10-11 C	10-12 C	10-13 C		
	芸術家の「三王」を切	母子のファッションショー	他会場でのペット回覧の会		

A：非常に重要で、よくできる必要がある。

B：普通であって、一般的にできればよい。

C：あまり重要でなく、必要に応じてできればよい。

4. 結果

求められるセンター機能の全体像を検討するため、本チャートに示された「仕事」を類型化して整理した。また、各「機能」については、Aを2点、Bを1点、Cを0点として、「仕事」別に集計し、全体からみた比率を算出した。その結果を表3に示す。

表3 センター機能の類型（仕事の系列）

系 列	仕 事	仕事別 点数	系列別 点数
実践研究	1A 子育て支援・ボランティア育成につながる実践的研究を行う	25	25 (22%)
	2A 多角的ネットワークの構築と発信を行う	9	36 (31%)
ネットワーク構築	4B 異世代・異文化交流ができる機会や場を提供する	13	
	8B 親同士の交流と父親の子育て参加を支援する	14	
	3A 子育て情報を収集し提供する	12	
情報提供と相談	7B 幅広い分野での子育て相談を行う	6	
	5B モデルとなる遊び場を提供する	11	30 (26%)
場の提供	9B 親子がリラクゼーションできる場を提供する	9	
	10B 親子で楽しみ学ぶイベントを実施する	10	
	商品開発	6B 子どもたちのニーズに合った商品を開発する	

表3の結果から、各系列について、得点に応じた面積比に基づいて図1を作成した。これをもとに、センター機能の全体像について検討しておきたい。

この結果は、第1に、「ネットワーク系」の機能の得点が最大であることを示している。ここでいうネットワークは、機能カードを見ると、機関間連携でもあり、人的ネットワークでもあることがわかる。また、「商品開発」の得点は低いが、ネットワーク構築のなかで実現すべき機能であると考えられる。

第2に、場や情報の提供など、親を直接対象とする「サービス系」の機能の得点が高い。しかし、機能カードを見ると、

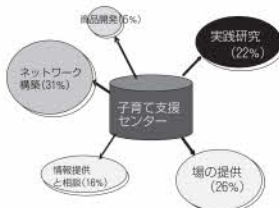


図1 センター機能の全体像

その一つ一つは開発的であり、親の自己形成とともに、社会的課題を意識し、よりよい社会形成を目指したものが多くあることがわかる。これらは、次の「研究系」と連動するものといえる。

第3に、「研究系」は、クドバスチャートでは重要度が1位（最上段に配置）とされたにもかかわらず、「系列」としては「実践研究」のみで、「仕事」も一つだけであり、得点比率は22%にすぎない。しかし、上に述べたとおり、第1の「ネットワーク系」、第2の「サービス系」の機能のほとんどは、第3の「研究系」につながっていくと考える。このことから、支援センターの「研究」は「純粋研究」ではなく、「実践」と連動して「センター・オブ・センター」としての役割を発揮するために行われる性格のものであると考える。

5. 課題

われわれは、今後も、「大学の子育て支援センター」としての役割を追求し続けたい。そのコンセプトは、「センター オブ センター」であり、それは、東葛地域をはじめとする全国の子育て支援センター、関連機関、関連団体を支援対象として、「社会に開かれた子育て観」を形成しようとするものである。その役割発揮のためには、日々の子育て支援実践活動と、その成果から情報や知見を生み出す研究活動との不断の交流が必要になる。

本稿では、そのための鍵概念として、①機関間ネットワーク及び人的ネットワークの構築、②社会形成を目的化した親の自己形成支援サービス、③子育て支援実践と連動した研究の3点について検討してきた。支援センターは、上の3概念に対応して、次の3点について、今まで以上に積極的な役割を発揮することが重要であると考えている。それは、①「発信」：社会に向けて本学からの情報やメッセージを発信すること、②「開発」：「子育てのまち」という社会形成に結びつく支援プログラムを開発すること、③「分析」：支援センター、大学教育、地域社会における子育て支援実践に関わる諸機能を構造的に理解するため、クドバスの手法等を活用して、いったん諸機能を分解してリスト化し、これを再統合して構造化すること、の3点である。本稿の終りにあたって、とくに③の「分析」

について、今後の研究課題を考えておきたい。本稿では、クドバスチャートを掲げ、その成果から支援センターの機能について検討した。これを便宜上「表」としたが、本来の表は行・列ともに統合されたものでなければならない。その点では、「表2」は、行については「仕事」への分類という形で一定の整合を図り、さらには系列化も試みているが、列については重要度順に並べただけで、他の行（「仕事」）に所属するカードとの整合は図られていない。このように、クドバスチャートの段階では、正しくは「構造化」された状態とはいえないのである。

クドバスで職業能力開発カリキュラムを作成する場合、チャート作成の次の段階として、「科目」列を設け、各カード（分解された達成能力）を「仕事」横断的に「科目」ごとに再配置する。このことによって初めて一定の構造化が行われ、「構造的カリキュラム」の作成が可能になるのである（筆者注：別稿「クドバス活用による親能力確実習得プログラム研究」参照。同稿の表「必要能力・資質構造図」がこれに該当する）。

本稿では、クドバスのもつ汎用性に基づいて、これを機能分析の手法として導入し、支

援センター機能のあり方について検討した。しかし、上に述べたことから、センター機能の「構造的理解」としては不十分な面がある。さらに、支援センターが「センター オブ センター」としての機能を十分に発揮するためには、大学の教育・研究機能及び社会の子育て支援機能をも構造的に関連づけて理解する必要がある。そのため、クドバスの「科目」列に換えて「課題」列を設定した場合の構造化のイメージを図2に示した。

図2では、大学及び社会における「子育てのまちづくり」支援機能も含めて、その構造を示そうとした。行については本稿で設定した「仕事の系列」を用いた。また、「課題」については、仮に、本研究の研究課題に基づいて設定した。そのため分解した機能の課題への帰一性や網羅性に欠ける面がある。今後は、それぞれの諸機能を分解してカード化し、これを「仕事の系列」別にリスト化するとともに、そのカードに基づいて、より適切な「課題」を設定し、支援センター、大学、社会を貫く構造化を図りたい。

これは、大学だからこそできる研究であり、大学だからこそ発揮しなければならない社会的役割であると考え。本センターを拠点とし、本学固有の「児童学」教育研究機能を最大限に活用して、本研究を進めていきたい。

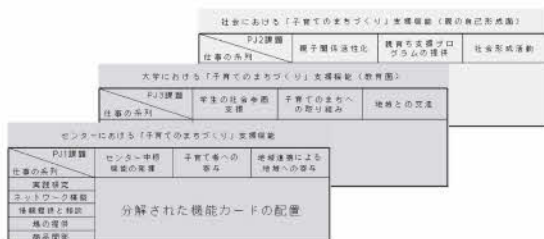


図2 センター機能の構造化イメージ

西村美東士：クドバスワークショップによる子育て支援社会連携研究センター機能の検討。聖徳大学子育て支援社会連携研究「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究」平成17・18年度研究集録、pp.11～15、2007 年から再掲。